社会貢献としての囲碁教室

ダイヤネット囲碁会　代表　福元　博幸

1.「レジャー白書2015」から見た囲碁

1）囲碁の愛好者

『レジャー白書2015』(公益財団法人日本生産性本部）によると、わが国の15～79歳のうち、囲碁を過去1年間に1回以上行った人は3.1%、人数に換算すると310万人でした。愛好者数は年度によってかなり大きな開きがあり（240～640万人)、調査対象に選任された方々の性格にも左右されるものと思います。

いずれにしても、14歳以下と80歳以上の方々を加えると、「日本人の囲碁愛好者は約500万人」という日本棋院の見解とほぼ一致します。

更に、日本棋院によれば「世界の囲碁愛好者は約4,000万人」ということで、中国が2,500万人、韓国900万人、日本500万人、台湾150万人、タイ100万人、アメリカ50万人、ロシア10万人、イギリス5万人・・と70の国際囲碁連盟に加盟する国・地域が続きます。

2）日本の囲碁愛好者の男女別・年齢別の構成

性別・年代別参加率（愛好者）は以下の通りです。

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計
男	7.6	4.1	3.8	2.0	4.0	6.8	17.0	5.9%
女	0.0	1.4	1.2	0.0	0.0	0.3	0.4	0.5%

特徴は「男女の差が大きい」「男子高齢者の参加率が高い」ことです。

「男女の差が大きい」ことは実態ですが、最近は少しずつ女性愛好者が増えてきました。後述の老人ホームにおいても、女性の皆さんが待ってくださっています。又、調査されていませんが、80歳代もかなり高い愛好率だと推定されます。囲碁は相手が居れば、何歳でも楽しめます。

3）囲碁への参加希望率(やってみたいと考えている人の割合)は高い

調査対象者の「参加率3.1%」に比べて、「参加希望率は5.8%」と高いことも囲碁の特徴です。「対象者の270万人が、これから囲碁をやってみたいと意思表示をしている」と言うことになります。大変嬉しい数字です。

4）高齢者にとっての囲碁の効用

出かけて、人と会う　→「出歩く」「会話する」
対局する　→「指先を使う」「頭を使う」
喜び、悲しむ　→「喜怒哀楽を伴う」

まさに、「ボケ防止」の処方です。(「囲碁愛好者はボケない」という医学研究レポートもあるそうです。)

2.社会貢献としての囲碁教室

1)「ダイヤネット囲碁会」設立の経緯

当会のスタートは平成11（1999）年、ダイヤ財団のリードの下に生まれたDAA*の1グループとして出発しました。以後17年間、関東地区の三菱系企業の退職者が中心となり20～30人ほどが集まって、月次の例会（勉強会)、大会（又は合宿）を重ねて来ました。現在は会員数21名（うち女性2名、平均年齢78歳）が、都内地区と常磐地区を拠点に対局（囲碁用語では「手談」）を楽しんでいます。また、三菱グループ各社の囲碁愛好者が集う全三菱囲碁大会にも参加しています。

DAA*:「ダイヤ・アクティブエイジング・アソシエーション」の略称、三菱系企業の退職者がメンバーの自主的な会員組織で、親睦行事の他、社会参加や社会貢献活動を行っている。

2)『ライフ＆シニアハウス港北』様での「出前囲碁」

平成12年頃、会員の誰からともなく「囲碁を通じて社会貢献活動ができないだろうか?」という話が持ち上がり、手分けして実情を調査しました。平成13年初めに、当時の囲碁会の事務局長が「全国有料老人ホーム協会」を訪ね「出前囲碁」のニーズが有る事を確認すると共に、後日「ライフ&シニアハウス港北」様から「喜んで受け入れる!」いう連絡をいただき、活動がスタートし15年が経ちました。

双方とも当初のメンバーはかなり変わりましたが、現在は月2回、約2時間／回、当会からは1回に4人訪問（9人のメンバーで分担、うち女性1人)、先方は5人（女性4人）が待っておられ「対局」を楽しんでいます。

当初は活動に際し、「すべて実戦方式で良いのだろうか?」「どんな感じで対局したらいいだろうか?」など取組に関

して慎重な意見もありましたが、結局「自然に、前向きに取り組もう！」という方針で臨むこととし、今日まで継続しています。決して「適当な遊び相手になる」のではなく、双方とも一所懸命で且つ、前述の「出歩き、会話し、手や頭を使い、喜び悲しむ」を実践しています。

以前、施設のスタッフの方から、「会話の仲間に入るのに苦手な男性の方もおられましたが、囲碁をきっかけとして会話が弾み、とても良い刺激になっています。」と伺ったことがあります。又、ご病気を抱えながらも「出前囲碁」には毎回顔を出していただき楽しんでおられた方がいて、大変感激しました。

3）『松戸ニッセイエデンの園』様での「出前囲碁」

平成18（2006）年頃、これまでNPOボランティア団体が続けられていた「出前囲碁」活動を、訪問する側の事情で我が囲碁会の「常磐部会」に相談が有り、引き継いだのが始まりです。

活動を開始して10年、先方の参加者が少なくなった時期もありましたが、現在は月2回、約3時間／回、当会からは都度2～4人訪問（4人のメンバーで分担）、先方は6～9人（女性2～3人）が待っておられます。

前述の老人ホーム同様、双方とも一所懸命です。しかも当該ホームは施設の規模が大きいこともあり、棋力レベルも大変高く、対局風景は一手一手真剣そのものです。

4）社会貢献としての囲碁教室

現在、囲碁会として公にしているボランティア活動は2件ですが、実際には我々会員の中には別のNPOボランティア団体へ参加され、児童たちへの囲碁指導や親子囲碁教室の開催指導をしている人もいます。

松戸ニッセイエデンの園

ライフ＆シニアハウス港北

「ライフ＆シニアハウス港北」やNPOボランティア団体で初めて囲碁を覚えようと来られる方々もいます。この初心者の方々への指導が、最も難しい対応といっても過言ではありません。我々の会ではこういう場合、高段者の方々が根気強く、相手毎に教え方を工夫しながら丁重に指導しています。上達の度合いはご本人の努力次第ですが、時折進歩の兆しが現れ、ご本人も嬉しそうです。

この活動に長年 携わっている囲碁会の会員から次のようなことを聞きました。

「囲碁の社会貢献活動（出前囲碁）は相手のある活動ですから、こちらの都合だけでは中断はできません。あまりはじめから背伸びし過ぎないようにし、自然体で取り組むことが大事だと思います。気楽に、自らも心から楽しみ、長続きさせる事が大切ではないでしょうか」。施設側からの要請がある限り、我々自身の為にも、この「出前囲碁」活動を継続していきたいと思っています。

3.「ダイヤネット囲碁会」のこれからの課題

①「健康を持続する事」

当たり前の事ですが、この事は喜びや技量向上にも繋がります。

②「新しい仲間を確保する事」

我々の会のメンバーも高齢化が進んでいます。囲碁会の堅持・発展の為にも、新たな仲間づくりに尽力したいと思います。

③全く別の視点ですが、将来は「コンピューターも仲間にする」

最近「囲碁でも、人間がコンピューターに負けた！」と話題になっていますが、そのコンピューターを動かしているのは「人」です。うまく仲間に引き入れ、楽しんでいきたいものです。